

読書経験から学びえたもの

原 一 宏

昨年八月十日、十一日に諏訪で「夏の会」が開かれ、一日だけ出席させていただく機会に恵まれた。元信濃教育会長・太田美明先生（現在日本連合教育会長）、前山梨医科大教授・川田殖先生（現在恵泉女学園長）、お二人の先生方を囲んで「ひとりひとりの教育に求める情熱。五十年先を見通して、今何をすべきか」という大きな問題について、日ごろの実践を交えながら活発な論議が展開された。その中で太田先生が「『西田幾多郎全集十九卷』が各学校にあるだろうか」と聞かれた。そして続けて「『西田幾多郎全集』がないような学校は、当時の校長がヘボかったんだ！」と言われた。私自身も、諏訪の哲学会で西田幾多郎の『善の研究』について少し

かじりかけたものの、あこがれの『西田幾多郎全集』は今までに自分の蔵書の中にはない。

さて、長峰中であつただろうか。図書館には確になかった。図書館は、何回か探し回ったが、西田幾多郎全集らしき本は見当たらなかった。焦る！ 長峰中の校長室に掲げられた当時の校長先生の顔を、もう一度見あげる。『西田幾多郎全集』が万一ないとすればこの〇〇校長先生はヘボなのか？ しかし、ヘボそうな顔は決してされておらず、初代校長先生から連なる歴代校長先生のどの顔も気品に満ちていた。太田先生も大げさなことを言うものだ。しかし、核心を突いているようにも思える。

今年になって、長峰中に新しい校長先生が来られた。図書館教育がご専門ということだ。一年半も長峰にお世話になっている私が恥ずかしさを乗り越えて、長峰に来られて六か月の本間校長先生にすけすけと聞いてしまった。

「先生、長峰中に『西田幾多郎全集』なんてありますか？」

答えはイエスであつた。イエス？ ということは長峰にあるということだ。さすが校長先生だ。しかし、すぐには全集の在りかを教えてはくさらなかった。「図書館にはないけど……探してごらん」必死に図書館以外の書棚を探し歩いた。「あつた！」思わず叫んでしまった。なんと、その全集は、あまり人けのない二階の片隅の書棚に追いやられていた。過去十年ぐらひは人の手にさわられたことがないごとく……ついでに『赤彦全集』も……。今、『西田幾多郎全集』があなたの学校のどこに置かれているだろうか。もしかしたら、図書館以外のところで、眠っているかもしれない。

小学校にあがつたとき、若い男の担任の先生が、ある教室に私たちを案内された。たくさん本ののある部屋だ。子どもながらに、その本の多さに驚いた。図書館というところの何ともいえない落ち着いた空間に、その本のおいひのする心地よさに思わず時を忘れ、本を読み始めたのはそれからいく日

もたたなかった。ふと、壁のほうに目をやると、お二人の立

派な写真が掲げられていた。にこにこしていて、すばらしい魅力的な笑顔だった。後でわかったことであるが、この二人こそ、わが母校に毎年たくさんのお本を贈ってくださっている方であつた。そのお二人の名前を見ると、「原一衛」「原一平」と書かれている。家の人から、あれは東京にいるおじさんだよ、ということの後で聞かされ、さらに驚いてしまった。毎年一回、このおじさんから、兄弟三人に本が贈られてきた。それがテレビ以上に自分にとって楽しみであつた。包みを見ると、送り主が「原一衛」になっていて、あて名は父の名前である。しかし、包みの紙や形を見た瞬間にあて名が父であつても中身は本であるということがわかった。暮れの時期になると毎年贈ってくれるので、とても楽しみでわくわくしていたことを思い出す。

いちばん最初に贈ってくれた本は『いやいやえん』という本であつた。何回も何回も読んでみた。

私にとって、読書への意欲を駆りたててくれた人におじさんをまつ先にあげたい。小学校四年生ぐらひからは伝記ものが多くなった。『牧野富太郎』『シュバイツァー』など、当時金子書房から出ていた『少年少女新伝記文庫』である。伝記ものは何といつてもその人の偉大さに深く感動させられた。

そのころ、父から「本をたくさん読めよ」ということは何回か言われた経験がある。父が最初に買ってくれた本は、当時集英社から出ていた『少年少女 世界の名作 全三十巻』である。

第一巻～十四巻では金色の表紙カバーであり、第十五巻～第三十巻までは銀色の表紙カバーであった。兄弟三人で、競争して読んだ。かし姉にはついに勝てなかった。一巻のバーネット作『公子』から始まり、はやく銀色の表紙カバーにこどり きたい一心だった。十五巻のデュマ作『鉄仮面』から金色になる。姉の読んだ後から読んでいくので、初めて聞くあの何ともいえない新鮮な気分はなかったが、自分と主人公が一体になっていく心地よさはある種の快感であった。

全部読み終えた後、父が買ってきてくれた本もまたユニークなマンガ本であった。一度もマンガという雑誌は買ったことがなかったがこれは、講談社から復刻本として出た田河水泡作の『のらくろ』だった。布表紙ですばらしい本だった。野良犬黒吉が下士官からどんどん出世していくストーリー。素朴さの中に、思いやりとユーモアを兼ね備えたのらくろの生き方に、子どもながらに夢と希望を与えてくれた。

中学・高校、この時代はやはりあまり読書という読書はし

ものだ。友達と自分の人生について語り合う。その中には恋愛論だの結婚論だのももちろんあった。あるいは、一日じゅう読書にふけることもできた。哲学への興味を切り開いてくれたのも友達であった。青春時代だれしも必ずといってよいほど突き当たる大きな問いに、自分もこの時期ぶつかった。「おれは何のために生きているんだろうか」「死とは何だろうか」「生きるということはどういうことだろうか」……。根本的な問題について友と語り明かした。酒を飲みながら夜が更けるのを忘れた。友達はカントのことをよく知っていた。私にとっていまだにわけのわからぬ『純粹理性批判』をよく解説してくれた。

三年になってゼミを選択することになった。「教育哲学」の中の、特に実存哲学専門の先生について学習することにした。ハイデッガーが自分の興味とマッチしていたので「存在と時間」について勉強した。論文は「人間と死の問題」である。今読み返すと、まったく恥ずかしい論文である。

念願の教職の道を歩み始める。現実と理想の乖離に悩む日が続く。子どもがかわいいと思っていた時期はつかの間に過ぎ、ガリレオの言う「神なき知育は知恵ある悪魔をつくることとなり」がしだいにわかるようになってきた。「教育とは何

た覚えはないが、江戸川乱歩の推理小説は好きだった。いったいだれが犯人なのか、後の後までわからないときはスリルとサスペンスがあった。

中学・高校時代は、やはりテストや受験の重圧感に悩まされていた時期かもしれない。家での勉強時間は、部活等で三十分～一時間ぐらいであったと思う。その中で本を読む時間をつくるのは、可能ではあったろうが、当時の私にとってはほとんど読む気力が生まれてこなかった。

今は大変興味のあるソクラテス、プラトンの話は、高校で倫理社会の授業でやった記憶がある。当時倫理社会は、柳沢という教頭先生が担当しておられた。わけのわからないことを聞いていると自然に睡魔が襲ってくる。睡魔が襲ってくる和我慢しきれずに、一瞬ぐつと頭を垂れる。それが何回か続くととてもいい気持ちになり、いつの間にか寝入ってしまった。目が覚めるときはどういうわけか、きまって授業終了を告げるチャイムと同時にあった。ほとんど全員がそんな調子だったから、教頭先生もきつとやりにくかったにちがいない。しかし、どんな状況であれ教頭先生は一言も怒らず授業も淡々と進められていった。

大学に入ってから、中学校・高校時代と比べて、時間にもある程度余裕があった。ゆとりのもてる生活はとてもいい

だろうか」それにかかわる本をむさぼるように読んだ。しかし、読めば読むほど実践から遠のいていく自分がわかってきた。

附属小学校の研究学級が探しあてた教育の原点は、「児童の教育は、児童にたちかえり児童によって児童のうちに建設されなくてはならない。そこからではない、うちからである。児童のうちから構成されるべきものである」という一文により示されており、淀川先生はさらに「教育は理想のうちに思想を背景として事実を存在させることである」ともいわれている。

事実をつくり出すことが私たち教員の使命であるのかもしれない。私はいろいろな考えながら、さらに教育に関する実用書を買ひあさることになった。五年ほど前のことだろうか、向山洋一の教育技術の法則化運動が活発に展開され、全国的に広がっていったことがあった。字のごとく教育技術を法則化して広めようとする運動である。明治図書もそれに乗じた。しかし、私は、こうすれば子どもがこう動くなどという法則は完全にはあてはまらないし、あてはまったとしても、安易に妥協できない怖さがあった。だから、ともかく法則化に関する本は濫読でも読んでみようと思った。だいたい百冊ぐらいいは読んだ記憶がある。一日一冊。だいたい三か月ぐらいい

要しただろうか。ポケット版のサイズだったのでとても読みやすかった。この経験で得たことは、自分の考え、見方、立場のまったく違うものに出合うことの大切さである。最初はまっとうから反対していたのに、不思議と共感できる部分があることを知った。明治時代の友人も法則化のサークルに入っており、すでに十冊の本を出版している。共感できる部分とは、法則化のサークルに入っている人たちは、非常によく勉強しているし、研究授業も自分から進んでやっている人たまた多いということだ。向山洋一氏は『授業上達論―黒帯八条半』（明治図書）の中で次のように述べている。「その一 試を一〇〇せよ その三 研究授業を一〇〇回せよ その四 研究会に一〇〇回出席せよ その五 法則化応募論文を一〇〇本書け その六 身銭を切って学べ」である。どれも自分にとって戒めになることばである。教師として前向きでない場合が多い私にとっては、いつも心していきたい。

教職に就いて十三年めが終わろうとしている。どうしても教育書は切っても切れないものであるで買い求めてしまう。毎月定期で読んでいる雑誌があるのでここで紹介したい。

『中学教育』（小学館）『児童心理』（金子書房）『PHP』（PHP研究所）『事実と創造』（一葉書房）『道德教育』（明治図書）

で「間違いは大切だ。間違ふことこそ貴い。できないから学校へ行くのだ」ということを大事にして、できるだけ子どもたちどうしの中で序列化されていくのを（子どもたちはさまざまな影響を受け、あの子は勉強ができるから頭が良い・あの子は勉強ができないからだめな子だと、とかく見てしまいがち）なくそうと努力してきたつもりである。しかし、子どもたちはいとも簡単にお互いを序列化してしまっていることが多い。中学校へ行けばこのことがますます顕著になってくる。これは決して子どもたちのせいではないことは明らかであろう。我々教師自身のテスト至上主義の壁は厚い。目の前に差し迫っている高校受験ということが頭にあるからだ。しょせん、テストができなければ駄目なのである。

知識・理解・技能のみが重視された現在の教育システムにますます拍車をかけていることも明らかである。まず教師を含めた社会全体の大人の価値観を転換させなければならぬだろう。

最近、企業の中には採用するに当たって「学歴をあまり重視しない」というところが多くなっているというのを聞く。そういった企業が全体の七〇パーセントくらいに達してきているという。理由を聞くと「有名大学を出たからといって必ずしもその人間が優れているとは限らない」ということであ

『現代教育科学』（明治図書）『総合教育技術』（小学館）『授業研究』（明治図書）『道德』『授業研究』（明治図書）など。このほかに、少なくとも三冊以上の哲学・宗教・雑学関係の本を買う。二万円ぐらいは月に書籍費として出ていってしまおう。本屋へ行くといつ買い込んでしまおうくせもついてしまった。その結果、自分の部屋（六畳）となりの部屋（八畳）は本だらけになってしまった。どうしたわけか、息子は今のところあまり本が好きそうなおぶりを示さない。

それにしてもたくさん本と出合ってきた。そして今、西田幾多郎の『善の研究』を少しかじりつきながら、またこれからのためにも本を求めていくだろう。

最後に、今自分が教育に関して思っていることを述べ、この任を終えたいと思う。

社会全体の価値観の転換（教育に焦点を当てて）

小学校・中学校と渡り歩いては十三年がたとうとしている。ほんとうに時間がたつのは早いものである。たくさん子どもたちに接してきて改めて思うことは、まさに大人社会のゆがみを子どもたちは背負って生活しているということである。政界の中での度重なる汚職、毎日報道される殺人事件・強盗事件等……、数をあげればきりが無い。また、小学校

った。私はこれを聞いて胸をなで下ろしたような気分になった。良い傾向だと思ふ。また、文部省で掲げ定着してきた「学校五日制」は子どもたちを家庭へ返すという点から非常によいことだと思う。「教育」というものを「学校」という狭い視野から一歩広めたことは画期的なことであろう。まさに、これからの教育は「学校教育」「社会教育」「家庭教育」等に分業していかなければならぬだろう。

「教育」をそのような観点から考えると「学校」の役割を改めて考え直す時期に来ているといつてよい。学校教育に即して言うなら、目の前にいるその子の良さ・個性を集団の中でどのように伸ばしていくかということに尽きると思う。

我々教師は改めて真剣にそのことについて考え、実践していかなければならない使命を担っているのである。そう考えると身が引き締まる思いである。

（一九九五年一月）